

## 1. 日本語教師のオーストラリア報告

### (1) オーストラリアはどんな国？

1994年8月、海外派遣教員としてオーストラリア・クインズランド州に日本語を教えるためにやって来た。南半球では、これから春がたけなわになろうとする季節だった。

ブリスベンから西へ130km、大ディバイディング山脈の尾根にある人口9万人の町トゥーンバが私の赴任地である。この町は、オーストラリア中東部の農業地帯の中心地であり、春には花祭りが開かれる緑豊かな観光地でもある。その町の高台に私の勤務校トゥーンバ州立高校が建っている。クインズランド州の高校は、日本の中学と高校を合わせたような生徒構成で、13歳から17歳までの5学年の生徒が通っている。トゥーンバ州立高校は生徒数1500人という大規模校である。

出勤した最初の日、始業開始の9時までの間に、職員集会での紹介、朝礼での挨拶、授業の打合せがあり、1時間目が始まると欠勤中の日本語教員の代わりとしていきなり教壇に立たねばならなかった。35分の授業が1日に8コマあるのだが、この日は7コマの授業に参加した。しかし、午後3時に授業が終わると、それが1日の全ての業務の終わりだった。3時半には、生徒職員のほとんどは既に帰途についていた。日本よりものんびりした生活を予想していた私にとって、思いもよらずテンポの速い第1日目だった。

この日、私は、ジルという40歳前後のフランス語の非常勤教員と親しくなった。オーストラリア女性の多くが快活で行動的な印象を与えるのに反して、落ち着いた雰囲気でお金を感じさせる金髪の女性だった。ジルは仕事や生活のことを色々私に助言してくれた。

オーストラリアの生活環境は私たち家族の期待通りのものだった。大阪と東京にしか住んだことのない妻には、緑あふれる広々とした住環境や、南十字星輝く満天の星空は初めての経験だった。4歳の息子には、野生のカンガルーを間近に見たり、何10kmも続く海岸で砂遊びしたりすることは、おとぎの国へ来たような大きな驚きと喜びだった。

この国は、国土の広さと美しい自然環境に恵まれている。私の住むトゥーンバから内陸側に10分間車を走らせると、見渡す限り大農場や大牧場が広がる光景に変わる。その規模の大きさには、この大地の生産力の大きさをまざまざと感じさせられる。また、海側に3時間ドライブすると、有名なゴールドコーストやサンシャインコーストの美しく長大な海岸に到達する。この砂浜で心地よさそうに余暇を過ごす人たちの様子は、自然との一体感を心から楽しんでいるように見える。

この国は、農産物に恵まれている。とにかく野菜と果物が安くてうまい。塩と胡椒をふっただけの野菜をかじると、太陽の光をふんだんに浴びたたくましい味がする。果物は、寒冷地でとれるリンゴから、熱帯でとれるマンゴまで手軽に楽しむことができる。ジュースなどの簡単な加工品も種類が豊富で、1リットル当たり70円程度で材料そのままの味を楽しめる。

この国の人たちは一般に素朴で親切である。職場でも、レストランでも、お店でも、私たちは多くの人に話しかけられる。陽気で、冗談が好きで、ビールが好きで、付き合いやすい人が多い。

この国は日本と同程度に治安がよい。国土の豊かさと明るい国民性がそれを支えているのだろう。アメリカと比較すると、どの家のつくりも驚くほど無防備である。ハンマー一つで簡単に割れそうな我が家の窓ガラスに、最初の何日かは不安を感じたものだ。でも今は、夜の1人歩きも恐ろしいと思わなくなっている。そして、極端な貧富の差が日常では目に付かないということも、この国の治安のよさの原因の1つのように思える。

この国では、アジア人の姿を見ることが非常に多い。それは、近年、環太平洋国家の一員であることを強く意識し、積極的にアジアからの移民を受け入れてきたオーストラリア政府の基本政策の結果であろう。先住民族アボリジニを迫害した歴史、白豪主義を推し進めた歴史とは全く異なる現在の政策だ。このことは、アジア人の1人として、好感と安心感を抱くことのできる状況である。

この国の人たちはアウトドアが好きだ。気温が20度を越えると、水着そのものといった格好で町中を歩く人が現れる。スタイルの良い人が多いので、ドキリとさせられることがある。彼らは実際に海へ行くのも大好きだ。トゥーンバのような内陸でも、ボートやヨットを持っていて、週末のたびにビーチへ出かける人も多い。彼らは並はずれてスポーツが好きだ。ハイスクールでは、毎週水曜日がスポーツデーになっていて、午後は思い思いのスポーツに興じることになっている。とりわけ人気の高いのがラグビーとバスケットボールだ。職場でも、しばしば前日の試合の話題に花が咲く。オーストラリア人はどのスポーツにおいても荒っぽいプレーを好む傾向がある。オーストラリアンルールのラグビーなどはその典型で、試合中にしばしば乱闘になりかける。観客はそれを見て、一層興奮するのである。

「3時以降の自由な時間のために1日が存在し、週末のために1週間が存在し、ホリデイのために各学期が存在し、楽しむために人生が存在している」と同僚の1人がオーストラリア人の生き方について説明してくれた。私は好意をもってこの言葉を聞くことができた。

トゥーンバ州立高校では日本の高校と同じように、先生のうちの誰かが休暇を取り、その人の担当のクラスが自習になると、他の先生2人が監督に行くというシステムになっている。私にその割り当てが回ってくるときには、ジルと一緒に監督をすることが多かった。ジルはそのたびに色々な話を私にしてくれた。

「私たちオーストラリア人はね、怠け者で馬鹿なのよ。そろそろタカオも気がついたんじゃない？」と、返答に困るような率直さで彼女は切り出した。

「ほら、この生徒たちをごらんください。こちらが注意をするまで、いつまでも意味のないおしゃべりを続けるでしょ。頭の中は、友達と遊ぶことや今度の週末のことや次のホリデイのことでいっぱいなのよ。自分から進んで勉強や政治や文化のことを考える生徒なんていやしない。そしてそれはね、大人もまったく同じなのよ」と続ける。

そんな風に言われてみると、私の前でにぎやかに自習をしている高校生たちが怠惰に見えてくる。でも、それはどの国の生徒でも同じだとも思えた。

「確かにこの国はね、広さと気候には恵まれているわ。食文化はちっとも発達していないけれど、野菜や果物や肉そのものが安くておいしいのよ。でもそれがね、かえって人間をダメにしているの。つまりね、そんなに一生懸命働かなくても食べていけるのよ」

ジルのこの言葉は、この国への1つの見方なのかもしれないと私には思えた。

「オーストラリアはね、暴力の国なのよ。男たちはみんな頭の中はからっぽのくせに腕力に訴えることが大好きなの。この国の離婚率がどのくらいかタカオは知ってる？なんと50%に近づこうとしているのよ。その第一の原因はね、男たちの妻に対する暴力なのよ。クインズランドの高校ではね、成人しても家庭で暴力をふるわないようにしようっていう教育を来年度から男子生徒に対して始めるのよ。信じられる？」

「男たちが、もう1つ大きな価値を感じているのがスポーツよ。それもね、荒っぽくて単純なやつほど人気があるの。ある意味では暴力指向と同じね。私はね、ラグビーが好きで男が大嫌い。そんな男ほどね、家で奥さんやこどもを殴っているのよ。タカオ、覚えておいてね、ラグビー好きのオーストラリア人に気をつけるってこと。奴らは馬鹿で暴力的、これは間違いないことよ」

「この国にはね、オーストラリア独自のルールを持っているスポーツがいくつかあるのよ。バスケットボールに似たネットボール、ラグビーまがいのオージーラグビーなどがその代表ね。なぜこんなスポーツがあるかわかる？オーストラリア人は馬鹿だから、どんなスポーツもルールを単純にしないとできないの。単純なルールの方が楽しいの。ほんとおかしいでしょ」

暴力はさておいても、スポーツを愛する国民性というのは美德に数えてもいいのではないかと私は彼女に言ってみた。しかし、彼女の話の1つ1つには妙に説得力があり、私は引き続き聞き役にまわるしかなかった。

「オーストラリアはね、今も昔も人種差別の国なのよ。今アジアからたくさんの人たちがやって来ているでしょ。表面的には今のところ大きな問題は起きていないの。でもね、タカオ、あなたは気がついたかしら、白人とアジア人のカップルはまれにしかないってことを。中国人は中国人と暮らし、タイ人はタイ人と暮らしているわ。移住してきたアジア人たちはみんな働き者よね。どんどん金持ちになっていくわ。そして、白人たちの多くは怠け者よ。かれらの妬みがこれからどんな形になっていくのかわかったもんじゃないわ」

「実はねタカオ、私の主人はエジプト人なの。私が彼と結婚したときにね、私の親兄弟は私と縁を切ったのよ。実の母親とさえ、それ以来一度も会ったことないの。これがごく普通のイギリス系オーストラリア人の感覚なのよ。そして私の国はね、エジプト人である私の主人がこの国に永住することを拒否しているのよ。私は時々他の国へ移住することさえ考えるわ」

「タカオ、あなたはアジア人よね、もし、あなたが独身で、この国の白人の女と恋をして結婚をしようとしたとしたら、それまで親切だったまわりの人の中の何人かは確実に態度を変えるでしょうね。それがオーストラリアという国なのよ」

人の批評というものが、常に一面的であるということを既に私はよく知っているつもりだ。だから、彼女の話がそのままこの国の全てであるとは思わなかった。ただ、彼女が誇張のない思いを率直に話していることは伝わってきていた。

オーストラリアにやって来て1ヶ月後、9月の終わりから10月にかけて、みんなが待ちに待った2週間のホリデイがある。私たちもまた、半径300kmの範囲の近場でドライブを楽しむ計画を立てていた。

ホリデイが始まる数日前から、教室にいる生徒の数が少しずつ減ってくる。休みが始まる前日には、五分の一程度の生徒が欠席している。つまり、自主的にホリデイに入っているわけだ。こういうところを指してジルは「私たちは怠け者」というのであるが、気ぜわしい日本で生活してきた者からすれば、このおおらかさを羨ましく思うことがある。

授業最終日は先生の方も落ち着かない。心ここにあらずという様子がありありとわかる。授業が終わった瞬間に「Have a nice holiday! 」と言い放って弾けるように出て行く。まさに、「人生は楽しむためにある」という彼らの生き方を肌で感じる瞬間である。

授業最終日、ジルはヨーロッパ行きの航空券が安く確保できたと非常に喜んでいて、実家のあるフランスでの休日をとて楽しみにしていることがよくわかった。この日、ジルは私に「実はね、タカオ、私の結婚は2度目の結婚なのよ」と話してくれた。

「そうだったのか」と私は納得した。彼女の言葉に感じられる迫力は、一つ一つの話が彼女の実体験であることから来ていたのだ。

オーストラリアでの生活も2ヶ月が過ぎ、私たちはここでの暮らしを落ち着いて楽しみ、良い経験をしているという安定した実感を持ち続けている。相変わらず、住環境は快適で、食べ物はおいしく、まわりの人たちは親切である。

一方で、ジルの話は現在の私の考え方や行動にかなりの影響を与えている。例えば、全ての人が親切だという幻想から覚め、どの国にも必ずいる酔っ払いや無頼漢に自分の家族を近づけないように気を配るようになった。また、これまで私があまり気づかなかった情報の存在に意識が向くようにもなった。それは、社会から暴力をなくそうという学校でのキャンペーンや、離婚の増加を暗にいましめる新聞の統計や、中国人マフィアと白人政治家との抗争に関する報道などの情報である。これらの情報の影にあるものが、この社会の本質の一面ではないかとジルの話を聞いてから疑うようになったのだ。

一つの国の社会のことを、ほんの数ヶ月そこに暮らただけで、簡単に理解し把握できるとは思っていない。ただ、ジルのおかげで、私はここが「おとぎの国」でないことだけは理解し始めていた。

## (2) 乾いた大陸 雨水はおいしい飲みもの

トゥーンバは毎日天気良かった。ここで暮らし始めて半月の間、一度も雨が降らなかった。そのことを私たちはとても喜んでいて、原色の空はどこまでも青く、日ざしは日本の何倍もきつかった。

初めて小雨が降った日、私の家族は雨具をもっていないことに気がついた。あわてて近所のショッピングセンターに傘を買いに行ったとき、町の中を歩いている人が誰一人傘をさしていないことに気がついた。それどころか、皆が気持ち良さそうに雨に濡れながら歩いており、中には両手をあげて天を仰ぎ体中に雨を浴びている人もいた。私はこの光景に不思議な印象をもった。

1ヶ月半ほど後のある日、同僚のアリソンが職員室から窓の外を指して「北側の山に雲がかかっているでしょ。もうすぐ雨が降るわよ」と言って話しかけてきた。その時職員室にいる10人ほどの先生は皆、窓の外をうっとりとした顔で眺めていた。やがて彼女の言

うとおり雨が降り始めた。皆の顔色がぱっと輝くのが私にはわかった。待ちに待った雨期がやってきたのだ。

校庭に出てみると、生徒たちが晴れの日以上に歓声を上げながらボールを使って遊んでいた。皆ずぶ濡れで泥だらけだった。その様子を見ている時、同僚のマークがやはり全身を雨に濡らせてやって来て、すれ違いざまに「実にいい天気だね」と挨拶してくれたのである。

オーストラリア東部全域は数年来のかんばつにみまわれていた。そのかんばつが、農牧業地域に与えた影響は特に深刻だった。国中の多くの地域で大地はひび割れ、大量の農作物が枯れ果て、牛はやせ衰えていた。乾燥が原因の山火事も各地で発生していた。小麦も不作だった。

トゥーンバは、クインズランド州南部の農牧業の中心都市で、別名をガーデンシティという。その別名は本来、雨に恵まれた土地であることを示している。ここでは、4月から10月の乾期でも、平均すると月に2度か3度の雨が降る。しかし今年、この地域は、かんばつの影響をまともに受けて大きな被害を被っているのである。

私たちが単純に喜んでいた晴天続きの毎日の裏に、そんな事実が隠れていたのだ。

10月のある日、千葉県から22人の教育使節団がトゥーンバにやって来られた。私はオーストラリア側の日本人スタッフとしてこの町での全行程に同行した。その一行への歓迎パーティーの席で、トゥーンバ教育委員会代表が一通りの歓迎スピーチの最後に、「今日皆さんのために用意した飲み水は全て雨水です」と自慢するのを聞いた。私はこの言葉に強い違和感を覚えた。日本人の私にとって、雨水は水道水よりも不潔なものであったからだ。

気になった私は、飲み水について何人もの友人に質問をした。「水道水は色々な化学物質が入っているけど雨水は純水よね、雨水の方がおいしいに決まっているじゃない」とある同僚の女性教員は答えてくれた。「雨水は汚いので、日本では普通飲まないんだ」と私が言うと、その彼女は少し気を悪くしたようだった。私はあわてて「日本は空気が汚れているからなんだよ」と言って取り繕わなければならなかった。

逆に私は「日本では、山から流れ出る小川の水や湧き水がとてもうまいんだ。ボトルにいれて売られることもあるんだ」と彼女に言ってみた。「川の水を飲むの?」と今度は彼女の方が、いかにも不潔そうだという顔をする番だった。「私たちは川の水をそのまま飲むことはないわ」と続けた。確かにトゥーンバ周辺の川の水は、鉞物をたくさん含んでいそうな濁った色をしている。

町の内外の家を観察すると、飲み水として雨水をためておくための大きな水槽がほとんどの家に備え付けてあることに気がついた。水道が完備しているトゥーンバでも、わざわざ雨水を集めて飲んでいるのだった。屋根に落ち、樋を伝わった雨水を、そのまま水槽に溜めて水道水よりおいしいと言って飲んでいるのだ。そして確かに、その雨水は飲み水として悪くないと私も思うようになっていった。

日本を出る前に、オーストラリア人は食事の後に食器を十分洗わないという話や、シャ

ワーをほんの5分程度しか浴びないという話を聞いたことがあった。それはなかば以上事実だった。なかばというのは、地域によって、人によって、家庭によって差が大きいからだ。

ブリスベンで発行されているサザンクロスという日本語新聞の質問欄に「オーストラリア人は食器を洗ったとき、どうして洗剤の泡をきれいに流さないのですか？」という質問があった。その答えは、「オーストラリアでは降水量が少ないことから、水の無駄遣い防ぐために、洗剤を水で洗い流すよりタオルで拭く方が良いという生活習慣が残ってるようです。」というものだった。

シャワーの時間が一般に短いことも水が貴重であることに基づいている。この町にやって来る日本人留学生がホストファミリーともめる原因の1つが、シャワーの時間が長すぎるということだ。日本人留学生が30分間シャワーを浴びると、ボイラー用タンクに溜めである家族全員分の水がなくなってしまうのだ。

私は今、食器洗いに水をあまり使わないことも、シャワーの時間が短いこともよく理解している。それは嗜好の問題ではなく、乾いた大陸を生き抜いてきたこの国の人たちの知恵からきているのだ。

年も押し寄せまった12月28日のトゥーンバの新聞の一面に、今年が1919年以来最も乾いた1年だったことが載せられていた。年平均雨量が967ミリのこの町に、一昨年は723ミリ、昨年は479ミリ、今年は462ミリしか雨が降らなかったということが淡々と記されていた。

それでも11月と12月は週に一度の割合で雨が降った。まがりなりにも雨の季節に入ったおかげだった。かんばつの被害が解消されたわけではないが、人々の顔つきが少しは柔らかくなったように思えた。山の草木も力をふりしぼったかのように緑に変わっていった。

いつの間にか、私も雨の気配を感じることができるようになっていた。北の空に雲がかかるのがわかり、風の中に雨のにおいがまざっているのを感じるようになっていた。私もまた、トゥーンバの住民になっていた。

そのうちに私も雨降りの日に、こんな挨拶がごく自然にできるようになるかもしれない。  
「実にいい天気だね」

### (3) 小学校勤務の日々

3ヵ月間、小学校で日本語を教えることになった。ある小学校の日本語の先生が産時休暇を取った後、彼女の補充ができなかったのがその理由だった。

私はこれまで半年以上、トゥーンバ州立高校に勤務してきた。この州では、海外からの派遣教員は単独で授業をできないことになっているので、常に現地の先生とチームを組んでアシスタントとして働いてきた。ところが今回は、私が単独で授業をする以外日本語教員がいなかった。そのため州政府は、ジェーンさんという経験豊かな退職教員を私のパートナーとして臨時雇用したのだ。たてまえ上は彼女が正式な先生で、私が外国人アシスタントということなのである。トゥーンバ市の中心にある生徒数800人のイースト小学校

をベース校として、郊外にある生徒数200人のウィスコット小学校、山間部にある生徒数100人弱のマーフィーズ・クリーク小学校をかけ持ちすることになった。時間割にしたがって、一周約50kmのルートを自分の車で授業をしてまわる毎日が始まった。

初めてイースト小学校に出勤した日、車を降りた瞬間に何十もの子どもたちの視線を感じて戸惑ってしまった。私はまるで動物園のオリの中の動物だった。間近に見る日本人に対する子どもたちの純粋な驚きと好奇の視線には苦笑するしかなかった。やっとのことで「グッドモーニング」と私が話しかけたとき、子どもたちは一層の驚きを表情に見せただけで返事をした生徒は一人もいなかったのである。

日本語の授業は上級学年である6年生と7年生だけにあった。私は45分1コマの授業を4つか5つの部分に分けて行うようにした。復習・文法・文字・ゲーム・物語などの異なった内容を5分から10分ずつ次々と教えていった。この方法がうまくいき、どのクラスでも授業はテンポ良く進んでいった。多くの生徒が楽しみながら日本語の勉強をしてくれているように見うけられた。準備に追われて大変だったが私も楽しかった。

子どもたちにとって、私の口から出る日本語を聞き、そのまねをするだけでも驚きだったようだ。例えば私が「かきくけこ」というだけで教室内にどよめきと笑いが起こった。日本語の発音そのものがおかしかったのだ。文法事項については、1回の授業で教える内容は1つの表現にしぼった。授業の最後には、ゲームや紙芝居や絵本など楽しめる内容のものを必ず用意した。

2週間経った頃には、毎朝私が学校に着くと、多くの生徒が「ハロー、ミスター・タニー」「グッドモーニング、ミスター・タニー」と挨拶をしてくれるようになった。やがてその挨拶が「コニチハ、タニーセンセイ」「オハヨーゴザイマス、タニーセンセイ」と日本語に変わっていった。直接授業を持っていない低学年の生徒からも好奇の視線が消えて、親しみの表情になっていった。

グレートディバイディング山脈の尾根にあるトゥーンバから、幹線道路で山を東に下って10km行ったところにウィスコットという人口1000人に満たない集落がある。その集落の小規模校がウィスコット小学校だ。

郊外や山間部にある学校に勤務することは、とても楽しくていい経験になると多くの人から言われていた。素直な生徒がいて、美しい環境があるということで、私はとても楽しみにしていた。実際にウィスコット小学校は、広々とした芝生の敷地の中にある、1学年1クラス規模のきれいな学校だった。

ところがこのウィスコットの7年生のクラスは、なかなか私に馴染んでくれない唯一のクラスだった。2回目の授業で、何人かの生徒が机の上の名札を入れ替えるという、ちょっとしたいたずらをした。その結果、私が右側にいる生徒を呼ぶと、左側で別の生徒が返事をし、馬鹿にしたような笑いが教室内に起こった。他愛もないいたずらであった。しかし、別のクラスや他の学校では、この手のいたずらが起きる雰囲気は全くなかっただけに少しショックだった。もちろんパートナーのジェーンさんがすぐに厳しく注意してくれた。ただ、彼女がいなければ、このいたずらがどんどん発展していったであろうことは容易に想像ができた。

小学校の日本語教科書には、残念ながらときおり不自然な表現や明らかな間違いがある。

例えば、色の名前は、あかい・あおい・ちゃいろ・くろい・みどりという風に、形容詞と名詞が混乱したままで載せられている。私は全てのクラスでこれを名詞に統一した後、色カードを使ってカルタをした。ところがこの時も、ウイスコットの7年生だけが言うことをきかなかった。私が「後に続けて言うように」と指示を出して「あか」と言うと、必ず何人かの生徒が「あかい」と言い張った。私は一人一人に注意しなければならなかった。授業内容そのものなので、この場面ではジェーンさんも助けてくれない。

ウイスコットの7年生のこのような状態のことを、最も信頼のできる友人に相談し意見を聞いてみた。「リーダー格の生徒の中に強い人種偏見を持っている者がいるのではないか」「担任の先生が日本語の授業の存在に対して批判的なのではないか」「ウイスコットの住民の中には、財力がなくてトゥーンバ市内に住めないという貧困層がいる。そのことが影響しているのではないか」という3つに集約される仮説を得ることができた。この仮説を確かめる方法はなかったが、その全てに思い当たるものがあった。

ウイスコットの7年生クラスでは、他のクラス以上に心を込めて授業をしているうちに、反抗的な生徒はほんの少数になり、やがてその生徒たちも大きな混乱を起こさなくなった。そして、多くの生徒が日本語の授業に好意を持ってくれていると思えるようになってきた。ウイスコットもまたいい経験だった。

トゥーンバの北東20km、山あいの緑豊かな谷間にマーフィーズ・クリーク小学校がある。1学年1クラス、1クラスの人数は10数人という、非常に小さな学校である。マーフィーズ・クリークは、人口約300人の集落でトゥーンバよりも気温と湿度が高く、草木もよく茂っている。村の内外のほとんどの家が肉牛と馬の牧場を営んでいる。

ここの子どもたちは皆、素朴で人なつっこかった。1クラスに15人前後しかいないこともあって、いつもほのぼのとした家庭的な雰囲気の中で授業ができた。どの子も一生懸命話を聞き、楽しそうに遊んでくれた。

毎週火曜日はマーフィーズ・クリークで昼休みを過ごした。ある日の昼休み、7年生の何人かが「タニーセンセイ、一緒にサッカーしよう」と誘いに来てくれた。私は10人ほどの6、7年生と一緒にサッカーをして遊んだ。サッカーといっても、草原に立っている木と木の間がゴールで、帽子を置いたところがコーナーで、サイドラインは事実上ないというおおらかなものだ。しかし、緑のじゅうたんの上でのボール遊びは実に楽しかった。やがて、女の子も参加するようになり、3、4年生のチビちゃんたちも加わってきた。

ある時、夢中になってボールを追っていて5時間目が始まったことに気がつかなかったことがあった。そのとき私のまわりでは、この小さな学校のほとんどの生徒と一緒にサッカーをしていたのである。「やさしい巨人」と呼ばれているクリス校長は、「あんたが来てくれてとても感謝している。子どもたちもみんなあんたのことが大好きだ」と言って許してくれた。

2ヵ月半が過ぎ、小学校の勤務を終えて高校勤務に戻る日が近づいてきた。最後の何回かの授業の教材として、筆ペンによる習字、折り紙、コマづくりなどの材料を用意しておいた。楽しい思い出を子どもたちに残してこの仕事をやり終えたいと考えていたのだ。

各学校の生徒たちに、これまで教えてきたことの復習をしてみると、あれだけ力を入れ



で教えた様々な内容を、残念ながら子どもたちはあまりよく覚えていなかった。しかしながら、ほとんどの子どもたちに日本のことを好きになってもらうことはできていた。今では学校の中だけでなく、町の中で子どもたちに会ったときも「ハイ、ミスター・タニー」「ハロー、タニーセンセイ」と嬉しそうに声をかけてくれる。また、様々な保護者の方から、「私の子どもがあなたのお世話になっています。うちであなたのことばかり話しています」と話しかけられるようになった。そのことを私はとても嬉しく思っていた。

いくつかのクラスでは、そのクラスでの最後の授業のときに、みんなで書いたカードや色紙をくれたりもした。また、個人的に、小さなチョコレートや、たどたどしい手紙や、ちょっとしたプレゼントをくれる生徒もいた。それぞれに心がこもっていた。

最終日のイースト小学校では、朝礼のときにバルコニーの上から全校生徒に一言挨拶をした。また、お茶の時間に全職員が私のために簡単なパーティーを開いてくれた。

昼休み、全ての事務処理も終えてイースト小学校を出るとき、ジェーンさんが車まで見送りに来てくれた。彼女には感謝と友情を感じていた。

私が車に乗って学校を出ようとする、校庭にいた何十人もの子どもたちが駆け寄って来て、一生懸命手を振ってくれた。私も窓を開けて手を振った。

たくさんのたくさんの「さようなら」を聞きながら校門を出た。

#### (4) クジラは尊敬すべき生き物

オーストラリアの地方都市での生活では、野生動物に出会う機会がたくさんある。

春から秋までの暖かい季節、毎夜屋根の上を何匹ものネズミがはい回っているような音がする。これは、ポッサムという猫くらいの大きさの有袋類で、4、5匹がグループになって夜中にぞろぞろと木の枝や屋根の上を歩く習性を持っている。平気で音を立てて移動するのですぐに存在がわかってしまうという何とも無防備な連中だ。夜の間に動き回って木の実や人間の食べ残しを食べているようだ。猫とリスと狸を混ぜたような顔つきで、毛並みもフサフサしていて可愛いが、撫でようとするところぽど手を噛みつかれてしまう。オーストラリア人にとってはあまりに日常的な動物で、害獣でも益獣でもないので全く相手にされていない。

我が家の前の街路樹の穴に、ワライカワセミのつがいが住んでいる。彼らは木や柵の上の見晴らしのいいところで毎日数回見事に笑う。ワシやタカなどの猛禽類もたくさんいるのに、そんなに大声で笑って大丈夫かなと心配になるが、彼らもまたどう猛な肉食鳥類なのだ。オーストラリアのバッタは日本のものより一回り以上大きく15cmくらいのものもいるが、その大型バッタが跳ねたときにワライカワセミが一直線に飛んできて空中で捕らえる瞬間を何度も目撃した。また、家の前庭で七輪を使って私がヤキトリを焼いていて、目を離れた隙に1本失敬されたこともある。オーストラリアを代表する鳥で、愛嬌があるのでとても人気がある。

大型のトカゲのことをまとめてゴアナと呼んでいる。ある日、外出先から帰ると、家の周りを1mくらい大きなやつが、紫色の舌をペロペロさせてノッシノッシと歩いていた。

私たちは怖くてドアに近づけなかったが、後で聞くと「こっちが相手にしなければあっちも相手にしない。でも手を出すとガブリとやられるよ」ということだった。

我が家の裏手にある公園で、2 mを超す大型のゴアナ（レースモニターという種類）が樹上の鳥の巣にある卵を狙っていて、親鳥2匹と死闘をくり広げているところに出くわしたことがある。迫力のある攻防を2時間近く見物したが、私の見ている間には勝負はつかなかった。同僚によると、「木を登るタイプのゴアナは爪が鋭いから、引っ搔かれないように気をつける」ということだった。

有名なエリマキトカゲ（フリルリザード）を野原でうっかり踏みつけたことがある。30 cmくらいあるやつで、日本人の自分としてはこれでもびっくりするくらいの大きさだった。驚いた私が、もと来た方向に全力疾走で逃げると、やつも逆方向に2本足で全力疾走で逃げていた。

オーストラリアに来る前に、最も会うのを楽しみにしていたカンガルーは、トゥーンバ市街で見かけることはなかったが、郊外に出るとめったやたらと野生のがいた。超大型のレッドカンガルーから小型種のワラビーまで、何百頭、何千頭見たかわからない。

農業にかかわる人たちは、カンガルーの仲間たちを「ペスト」と呼んで嫌っている。農作物への害獣で、生息数も多いから仕方がないことだ。多くの人たちは車にカンガルーバンパーをつけて、運転中に現れても跳はねとばしている。カンガルーの肉はとても安く売られていて、犬の餌として買っていく人が多い。

でも、私たちの家族にとっては、やはりカンガルーこそがオーストラリアを代表する動物だ。彼らが草原やブッシュを駆け抜ける姿を見るたびに、その躍動感と美しさに歓声を上げてしまう。

### 「クジラを見たい」

1995年の9月、春の気配を感じるようになった頃から私は強くそう思うようになっていた。

私たちが住んでいるクインズランド州の沿岸地方は、クジラ見物で有名な地域だ。毎年春から夏にかけて子育てのためにザトウクジラ（ハンパバックホエール）の群れが陸の近くまでやってくる。餌となるプランクトンを食べるために、海の深みから口を開けて水面まで勢いをつけて泳ぎ、勢い余って空中に巨体が飛び上がる様子を見ることができるという。飛行機による見物ツアーや船を使つてのツアーがあり、運がよければ陸から見物できることもあると聞いていた。

次の週末、私は妻と5歳の息子を連れてブリスベンの北50 kmにあるブライビー島に車を出かけた。地図の上ではこの島の沖合もクジラの通路であるはずだった。やや内陸に住む私たちにとって、片道200 kmのところにあるこの島は、週末に行けるぎりぎりの距離だった。しかしこの日、ブライビー島からは、果てしなく広がる南太平洋が見えるだけで、クジラの姿を見ることができなかった。

確実にクジラ見物ができるフレイザー島へは、私たちの家から片道400 kmあった。しかし、無理な運転による事故の心配や子どもの疲労を考えると、出かける決心がつきかねた。そうこうするうちに夏が来て、クジラ接岸の季節が終わり、私たちはクジラが宙を

舞う姿を見る機会を失ってしまったのである。

「なぜ日本人はクジラを食べるのですか？」

春から夏にかけてのクジラの季節、私が勤務するトゥーンバ州立高校の生徒や同僚から何度もこの質問をされた。

「クジラは、頭が良くてかわいくて尊敬すべき生きものです。その上絶滅の危機に瀕しています。そのクジラを殺して食べるということは野蛮な行為以外のなにものでもありません」と彼らは主張する。この考えは、ほとんどのオーストラリア人の心の中に絶対的な正義として固まっている。

「日本人は、魚を食べるのと同じように、日本近海のクジラを捕獲して食用にしてきた。ただそれだけのことだ」と私はある友人に言った。

「クジラのような高等動物を魚と同様にあつかうことがおかしいんだ」とやや軽蔑した様子で友人は答える。

「日本人は、最小限のクジラを捕り、食用としての肉や油だけでなく、骨もひげも何もかも、工芸品や日用品の材料として利用してきた。100年前まで乱獲していたのは欧米人のほうではないのか」と私は反論する。

「クジラがどんなに友好的で素敵な生きものであるか当時は気がついていなかっただけだ」と平然と返される。

このように、動物愛護と環境問題の対象としてクジラを語るオーストラリア人と、食文化と伝統工芸の材料としてクジラのことを思い浮かべる日本人の議論はどこまでいっても噛み合わない。ある時、私は、「カンガルーを跳ねとばしておいて、クジラは偉大だという考えが理解できない」と言ってしまう、職員室の同僚全員を感情的させてしまった。その後、私は、「今では日本でもクジラを食べなくなった」と言っておまかすようになっていた。これ以上野蛮人と思われたまま今後を過ごすことは不都合の方が大きいと思えたからだ。オーストラリア人が時に見せる一方的な決めつけに、有効な反論をする自信がなくなったのだ。

実際にクジラを見れなかったこと、日本人の言い分を最後まで言えなかったことが残念だった。

## (5) アジア出身の人たちと

帰国が1ヵ月後に迫った1996年2月、私たちの町トゥーンバで、十数カ国のアジア人が力を合わせて旧正月を祝う「マルチカルチャル・フェスティバル」と名付けたお祭りイベントを行った。ショッピングセンターの駐車場に作った特設ステージでは、民族衣装のファッションショーや、中国の太極拳、エジプトのダンス、インドネシアの楽器演奏などが次々と演じられた。また、その周りに建てられた屋台では、韓国の焼肉、マレーシアのカレー、シンガポールのサテーなどが売られ、700人分があっという間に売り切れた。また、他民族文化ストールと名付けられた一角では、中国が書道、日本が茶道、ベルシャが織物を観客に紹介した。

5家族19人しかいないこの町の日本人も和服を着て集まり、全員で協力して茶道を披露した。動きの激しい各国のパフォーマンスと比べて、私たちが茶道を発表している一角

では、取り囲んでいる人たちがじっと静かにお茶をたてる動きに注目していた。そして、お茶とお菓子を振る舞われた人は皆、感嘆の言葉やため息を漏らしていた。その様子を見ていた人たちがまた次々と列に加わっていった。茶道が多くの観客を感動させるのを見て、私は日本人として自国の文化を誇りに思った。

午後3時から始まったこのお祭りは、数千人の観客でごったがえす中、夕方7時に行われた中国の獅子舞と爆竹の大音響の中で幕を閉じた。イギリス系の白人の多いこの町で、初めて行われたアジア人が旧正月を祝うお祭りだった。

実はこの祭りの目的は、アジア各国の文化を紹介することで、移民として急激に数を増やしているアジア人と、この町の保守的な白人との間の摩擦を小さくすることにあった。この町に住むどのアジア人も人種問題への危機感をもっていたのである。町の有力者をイベントに招待し、一般のオーストラリア人たちに各国文化の紹介をすることで、得体の知れない外国人と思われるかも知れない状況から脱出しようとしたのだ。

例えば1年前、ダウンタウンにたむろしていたトゥーンバの非行少年風のグループが、たまたま通りかかった日本人留学生へ暴行を加えるという事件が起こり、私たちを怯えさせた。暴行を加えた若者たちには、相手が日本人とわかっていたことが新聞記事から明らかだった上、逮捕されることなく今もこの町で自由にしていることにゾッとしたものだ。日本人ということで、私たちもまた理由もなく暴行を受ける危険があると思われたのだ。人種・民族問題のかかわるべき事は様々なエスニックグループに関して発生しており、この危機感アジア人に共通だったのだ。

この祭りを企画立案したのは、南クインズランド大学の副学長で、中国系オーストラリア人であるリー先生だ。私は、出張先でリー先生と一緒に仕事をしたことが縁で、この企画の日本代表を頼まれていた。2月末に行われたこの祭りのために、私たちは11月から毎週1回の会合を持っていた。

初めての会合でアジア各国の代表と話をしたとき、日本以外の主な国々が、今でも新暦の正月より旧正月の方を大切にしているということを知らされた。日本だけは、明治という節目の時代を経たときに、正月という一年で最も重要な祝日をも欧米に合わせてしまっていたのである。

会合のたびに、リー先生は各国の要望の調整に苦心していた。どの国も、舞台の時間や屋台の場所について遠慮なくリー先生に要求する。私もまた色々な要求をしたのだが、リー先生から「これで何とかやってくれ」と言われると、つい「わかりました」と答えてしまう。我慢することは美德であるという文化が身についているのだ。しかし、他の国の代表者はそんな一言くらいではおさまらない。忍耐が美德という文化はアジアの中でも日本独特のものだということに気づかされた。

また、人種問題に対する危機感も、日本人は他のアジア人よりずっと少ないことも感じた。一族をあげて移民をしてきている各国の人たちと、日本企業や官公庁の駐在員として一時的に暮らしている日本人とで、感じ方に大きな違いがあるようだった。

私は毎週の会合に出席し、意見を交換することで、アジア各国の人たちとの一体感を得たことも確かだった。しかしもしかすると、日本人であることの孤立感の方を多く感じたかも知れなかった。

お祭り会場予定地であるショッピングセンター内の中国レストランで何回目かの会合をしている時、なかなか役割分担に関する調整がうまく行かず、ついにアラブ代表が「この企画は無理が多すぎる。ここで計画を白紙に戻す勇気が必要じゃないか。今日の会議をもって終わりにしようじゃないか」と言い出した。その時リー先生は悠然と立ち上がり、店の外に全員を案内し、舞台や屋台を設置する予定の駐車場を先頭になってゆっくり歩き始めた。そして、「ここが舞台、ここが文化ストール、観客が2000人は入る」など丁寧に説明しながら一回りしたのだ。店に帰り、席についたときには、再びリー先生のペースに戻っていた。各国代表全員があらためて前向きになり、誰もやめようとは言い出さなかった。リー先生には文化の違いを超えたリーダーシップを感じた。

イベントが大成功で終わった後、私は本格的に帰国準備に取りかかった。その最中も、このイベントに係わる様々な余韻が私の中に残っていた。日本代表として旧正月祭りの企画委員をしたというこの経験は、日本の面目を保ったという満足感を私に与えたと同時に、日本が他のアジア諸国と多くの面ですれを持っていることを強く認識させてもくれた。

数日後、前述の中国レストランで私はリー先生とばったり会った。彼は私の手を取って、「日本人は協力してくれないかと思っていた。あなたにとっても感謝している」と言ってくれた。彼には、日本と他のアジア諸国とのすれが始めから分かっていたのだ。

心から嬉しくもあり、何ともほろ苦くもある言葉だった。